関連学会印象記

第18回ヨーロッパ心臓病学会総会印象記

安達　仁*

第18回ヨーロッパ心臓病学会総会は，1996年8月25日から29日まで英国バーミンガムで開催された．会場となったコンベンションセンターはバーミンガム空港に直結しており，バーミンガムに直接飛行機で来られるヨーロッパ諸国の参加者達にとっては便利な場所である．一方，日本人にとっては，英国第二の都市であるにも関わらず，いかにもイギリスらしいという観光名所不足のためか，知名度の低い都市である．

今年の学会はシンポジウム，ディベート，ハウトゥーセッションが125題，一般演題が864題，そしてポスター発表が1521題，あわせて2510題の発表があった．応募総数は7122題で，70カ国以上からの応募があった．日本は306題，4.3%を占めている．最も多いのはドイツの1120題で，以後，イタリア，イギリス，フランスと続く．演題のカテゴリー別では虚血性心疾患が1405題，臨床不整脈が1242題と，臨床部門ではこの二部門が日本の学会同様多かった．基礎系の演題も約900題と多く，臨床と基礎とバランスのとれた学会である．限られた学会参加日程のため，筆者の専門とする心臓リハビリテーション・運動生理学部門以外あまり参加できなかったが，筆者が参加し得たものと抄録を参考にして本学会の印象を述べる．

(1)虚血性心疾患

ここ数年，爆発的に使用量が増えているステントに関する演題が目立った．従来どおりのPTCA（経皮的冠動脈形成術）では再狭窄率が高くて長期開存が難しかったCTO（長期完全閉塞病変）に対してステント植え込みが有用であるという発表がめだった．また，血管分岐部への使用例や以前は適応外であった直径2.5㎜以下の血管へのステントの植え込みに関する演題もみられた．何種類かあるニューディバイスのうちで何がよいかという検討はもはやほとんどなくなり，ステントをどのような症例にどのように使用すべきかという点に関心が移っている印象があった．

また，PTCA後の再狭窄に関する発表も多く，それに関連して血管のリモデリングの話が多く聞かれた．小倉記念病院の木村らはIVUS（血管内超音波法）とQCA（quantitative coronary angiography）を用いて経時的にPTCAおよびDCA（directional coronary atherectomy）後の血管リモデリングを検討し，術後1ヶ月目には血管内径が拡大するものの3ヶ月から6ヶ月の間に再狭窄し始めるという二相性のコースをたどることを明らかにした．これが，今後，再狭窄予防にどのように活かされてゆくのか興味のあるところである．

(2)不整脈

不整脈についてはカテーテルアブレーションとPSVT（発作性上室性頻拍症）についての演題がめだった．当群馬県立循環器病センターからも内藤らがPSVTのslow pathwayに対してablationを行った場合にfast pathwayの不応期が短縮する機構に関して，以前からいわれているような副交感神経活性の減弱によるものではなく，slow pathwayとfast pathwayとのinteractionが消失したために起こるという知見を発表した．

(3)運動療法（心臓リハビリテーション）

外来心臓リハビリテーションの施行法に関するハウトゥーセッションが，学会第2日目に行われ，立ち見もでる盛況ぶりであった．米国同様，欧州でも運動療法は盛んである．陳旧性心筋梗塞や安定狭心症に対する心臓リハビリテーションの効果に関する発表も多くみられた．Murdochらは安定狭心症100例に対して運動療法を行い，181例のコ

*群馬県立循環器病センター循環器内科

Presented by Medical*Online

ントロール群と比較検討した結果，quality of life が運動療法群において向上したことを報告した．狭心症に対する運動療法の期待され得る効果として，耐糖能改善，高脂血症改善，肥満度減少など冠危険因子の減少と，心拍応答の安定化，運動時血圧の低下および側副血行路の発達のともなう虚血閾値の上昇などが知られているが，quality of life に関する検討は少なく，貴重な報告であった．また，日本では保険適応になっていない慢性心不全に対する運動療法の効果についての発表もいくつかみられた．それらによると，慢性心不全患者でも負荷量が強すぎなければ安全であり，かつ，運動耐容能を向上させることがわかった．慢性心不全患者の主な症状は動悸，息切れであり，運動耐容能の向上によりこれらの症状は減少する．そして，このことは quality of life の向上に結びつくことであり，今後のデータの蓄積が期待されるところである．

以上，今回のヨーロッパ心臓病学会総会は，16時間のフライトも苦痛に感じられない，収穫の多い学会であった．

Presented by Medical*Online